

『二人でなら——ゆーカス＆いんカス加入の日』

まだヨルファミリアが、今の10席すべてを埋めるより前の話。
その頃。裏の世界では、妙な少年二人組の噂が流れていた。

曰く——

「絶対に一人では現れない二人組がいる」

片方を追えば、もう片方が背後にいる。片方を囲めば、もう片方が突破口を作る。戦闘能力そのものなら、もっと上の者はいくらでもいた。だが——二人揃った時だけ、異常なほど捕まらない。その二人の名は、

ゆーカス。

そして、

いんカス。



1. 二人組

「ゆーカス！ 右！」

「分かってる！」

振り下ろされた刃を、ゆーカスが紙一重で回避する。直後――

「そこ！」

いんカスが死角から飛び込み、敵を弾き飛ばした。

「ナイス！」

「お前が危なっかしいだけ！」

「助かったんだからいいだろ！」

「毎回それ言っていない!？」

背中合わせになる二人。周囲には十数人。完全に包囲されていた。それでも――二人の表情に絶望はない。ゆーカスが前を見る。いんカスが後ろを見る。



「いける？」

「誰に聞いてんの？」

「だよな」

二人同時に笑う。

「行くぞ！」

二人が別方向へ飛び出した。それが彼らの戦い方だった。強大な力で正面突破するわけじゃない。圧倒的な速度を持っているわけでもない。特殊な切り札があるわけでもない。ただ、
互いが、互いの足りない部分を知り尽くしていた。

ゆーカスが前に出すぎれば、いんカスが引き戻す。いんカスが慎重になりすぎれば、ゆーカスが道を作る。言葉すら必要ない瞬間もある。二人なら戦える。二人なら逃げられる。二人なら——生き残れる。それだけで十分だった。

……そのはずだった。



2. 最悪の遭遇

敵を振り切った二人が路地裏へ入った、その時だった。

「ねえ」

女の声。二人の動きが止まる。

「……誰？」

ゆーカスが振り返った。そこに、一人の少女が立っていた。
長い黒髪。黒と深紅を基調とした装い。ただ立っているだけ。
武器すら構えていない。なのに、ゆーカスの身体が、本能的
に警告していた。——ヤバい。隣を見る。

いんカスも同じ顔をしている。

「……ゆーカス」

「ああ」

小声。

「逃げる？」



「賛成」

即決だった。ところが――

「なんで逃げるの？」

声が――

真横から聞こえた。

「！？」

二人が飛び退く。さっきまで数十メートル先にいた少女が、そこにいる。移動した瞬間すら見えなかった。

「いや待って待って！」

ゆーカスが両手を上げる。

「俺らなんかした！？」

「してないよ」

「じゃあ何！？」

少女は二人を見比べる。



「面白そうだったから」

「理由それだけ!？」

いんカスが思わず叫んだ。少女は少し笑った。

「ヨル」

「……え？」

「私の名前」

その名前を聞いた瞬間。二人の顔から血の気が引いた。知らないはずがない。ヨルファミリア。その頂点。絶対的最強の総帥。

ヨル。

「……………」

「……………」

沈黙。ゆーカスが、いんカスを見る。いんカスも、ゆーカスを見る。そして――



「逃げるぞ！！」

「言われなくても！！」

二人同時に全力疾走。

「えっ」

取り残されるヨル。

「……なんで？」

3. 追いかっこ

「なんで総帥本人があんなところ歩いてんだよ！」

「俺に聞くな！」

「お前が変なフラグ立てたんじゃないの!？」

「立ててねえよ！」

全力で逃げる。角を曲がる。



「よし！」

「撒いた！？」

「多分——」

「おーい」

前方。ヨルがいた。

「……………」

「……………」

二人は無言でUターン。

「ちょっと！？」

別の道へ階段を上る。建物を抜ける。屋根へ。

「ここなら——」

「ねえってば」

「うわああああ！！」



「なんているんだよ！！」

「追いかけてるから」

「それは知ってる！！」

ヨルは困ったように首を傾げた。

「話したいだけなんだけど」

「絶対嘘！」

「本当だよ」

「じゃあなんでそんな化け物みたいな追いつき方するんだよ！」

「普通に走っただけ」

「これが普通なら俺ら今日で引退するぞ！」

ヨルが少し考える。

「……じゃあ、捕まえたら話聞いてくれる？」

二人が固まった。



「ゆーカス」

「何」

「嫌な予感する」

「奇遇だな。俺も」

ヨルが笑う。

「よーい」

「待て待て待て！！」

「どん」

次の瞬間。

「散れ！！」

二人は左右へ分かれた。ヨルが一瞬だけ目を細める。初めてだった。それまでずっと二人は一緒に逃げていた。だが——分かれた。ヨルは、ゆーカスを追う。

「やっぱ俺！？」



必死に逃げるゆーカス。そして数秒後。行き止まり。

「最悪……！」

背後からヨルが歩いてくる。

「捕まえた」

「……マジかよ」

ゆーカスが構える。勝てない。そんなことは分かっている。
それでも——ヨルが一步近づいた。その瞬間、

「今！」

ゆーカスが叫ぶ。ヨルの背後。物陰から、いんカスが飛び出した。

「うおおおっ！」

「！」

ヨルが初めて反応する。攻撃そのものは簡単に止められた。
だが、その一瞬で、ゆーカスがヨルの横を抜ける。



「成功！」

「走れ！」

二人が再び並んだ。ヨルは追わなかった。ただ、その背中を見ていた。

「……なるほど」

口元が上がる。最初から。

二人は、本当に別々に逃げたわけではなかった。

片方が囃。片方が伏兵。即興。相談する時間などなかった。それなのに、完全に意図が一致していた。ヨルは呟いた。

「やっぱり面白い」

4. 一人なら

だが、その直後だった。別勢力の追手が現れた。先ほど二人が逃げていた相手。数はさらに増えている。



「見つけたぞ！」

「……マジ？」

「最悪のタイミングだな」

二人が再び背中合わせになる。戦闘開始。最初は互角だった。だが疲労がある。人数差も大きい。少しずつ押され始める。

「ぐっ……！」

ゆーカスが吹き飛ばされた。

「ゆーカス！」

いんカスが振り返る。その隙。

「しまっ——」

攻撃が迫る。ゆーカスが起き上がる。間に合わない。

「いんカス！！」

——轟音。だが、いんカスに攻撃は届かなかった。ヨルが立っていた。片手だけで、攻撃を止めている。



「…………え」

敵が震える。

「ヨ、ヨル……！？」

ヨルは静かに告げた。

「この二人、今私が話してる途中なんだけど」

空気が変わった。

「邪魔しないでくれる？」

それだけだった。数秒後、追手は全員逃げ出していた。

「…………」

ゆーカス。

「…………」

いんカス。ヨルが振り返る。

「さて」



二人が同時に身構える。

「まだ逃げる？」

「……もう無理」

「体力ない」

「じゃあ話せるね」

ヨルは二人の前に座った。

「君たち、いつから一緒なの？」

「……覚えてない」

ゆーカスが答える。

「気付いたら？」

いんカスが続ける。ヨルが笑う。

「仲いいんだ」

「普通」



「普通だな」

二人同時。ヨルは少しだけニヤツとした。

「ふーん」

「なんだよ」

「別に？」

ヨルは立ち上がる。そして——唐突に言った。

「ヨルファミリア来る？」

「……………は？」

二人の声が重なった。

5. 条件

「いやいやいや！」

ゆーカスが立ち上がる。



「軽すぎるだろ！」

「そう？」

「コンビニ誘うテンションじゃん！」

いんカスも警戒する。

「なんで俺たち？」

ヨルは答えた。

「強いから」

「俺らより強い奴なんているだろ」

「いるね」

即答。

「即答すんな！」

「でも」

ヨルの表情が少し変わる。



「君たち、自分一人で強くなろうとしてないでしょ」

二人が黙る。

「普通は自分の弱点を消そうとする。でも君たちは違う」

ヨルは、ゆーカスを見る。

「自分に足りないものを、いんカスに任せてる」

次に、いんカス。

「君も、自分にできないことをゆーカスに任せてる」

そして二人を見る。

「だから二人で一つの戦い方になってる」

沈黙。

「そういうの、私は好きだよ」

二人は顔を見合わせた。しばらくして、ゆーカスが聞く。

「……もし」



「ん？」

「俺だけ入るって言ったら？」

いんカスが驚いて見る。ヨルは即答した。

「入れない」

「え？」

「二人で完成してるのに、一人だけ取ってどうするの？」

今度は、いんカスが聞いた。

「じゃあ俺だけなら？」

「同じ」

ヨルは当然のように言った。

「欲しいのは、“ゆーカス”と“いんカス”じゃない」

そして――

「ゆーカスといんカスの二人組が欲しい。」



二人は黙った。ゆうカスが小さく笑う。

「……だってさ」

いんカスも笑った。

「どうする？」

「お前は？」

「先に言えよ」

「嫌だね」

「じゃあ同時に言う？」

「それで」

ヨルが呆れる。

「そこまで一緒なの？」

「うるさい」

「いくぞ」



二人が息を合わせる。

「せーの」

そして――

「「入る」」

ヨルが笑った。

「決まり」

6. ヨルファミリア本部

本部の扉が開く。ヨルが先頭。その後ろに、見慣れない少年二人。

「連れてきた」

レモンが振り返る。

「……また？」



まふいは無言で二人を見る。視線が怖い。

「ヨル」

「ん？」

「その二人、誰？」

「新入り」

「聞いてない」

「今決めたから」

「……………」

まふいの視線がさらに鋭くなる。ゆーカスが小声で囁く。

「なあ」

「何」

「俺らここで生きていけると思う？」

「もう帰りたい」



「奇遇だな」

ヨルが振り返る。

「聞こえてるよ」

「地獄耳!？」

レモンが笑う。

「で、どっちがどっち？」

「俺がゆーカス」

「いんカス」

「ふーん」

ヨルが二人の肩をそれぞれ軽く叩く。

「この二人、セットだから」

「セット扱い!？」

「間違っていないけど!」



ヨルは楽しそうに笑った。この日。後にヨルファミリアの中核を担う二人が加入した。やがて席次が整い――

第5席・ゆーカス。

第6席・いんカス。

二人は隣り合う席を得ることになる。

7. その日の夜

用意された部屋。ベッドに倒れ込むゆーカス。

「疲れた……」

隣では、いんカスが荷物を整理している。

「まさか朝起きた時は、今日ヨルファミリアに入るとは思わなかった」

「俺も」

「……なあ」



「ん？」

「入ってよかったと思う？」

いんカスの手が止まる。少しだけ考える。

「まだ分かんない」

「だよな」

「でも」

いんカスが振り返った。

「お前いるし」

「……………」

ゆーカスが固まる。

「何その顔」

「いや」

「変な顔」



「うるせえ！」

枕を投げる。いんカスが避ける。

「危なっ！」

「なんかムカついた！」

「意味分かんない！」

「拾え！」

「自分で拾え！」

「お前が避けるからだろ！」

「当たれってこと！？」

騒ぎ声が廊下まで響く。その頃。少し離れた場所で、ヨルとまふいが歩いていた。

「……うるさい」

まふいが呟く。ヨルは笑った。

「いいじゃん」



「ヨルがそう言うならいいけど」

ヨルが二人の部屋を見る。まだ出会って一日。実力も、これから。ヨルファミリアの中でどこまで行けるかも分からない。それでもヨルには、なんとなく分かっていた。あの二人はきっと——一人では届かない場所まで、

二人なら行く。

「楽しみだね」

ヨルが呟く。部屋の中から、

「近いって！」

「そっちが寄ってきたんだろ！」

「狭いんだから仕方ないだろ！」

「ベッド二つあるだろ！！」

という声が聞こえる。ヨルが吹き出した。

「……ほんと面白い」



こうして、いつか戦場で互いに命を預け、日常では肩をぶつけ合い、周囲から「お前ら距離近くない？」と言われるようになる二人の——ヨルファミリアでの日々が始まった。一人を選んだのではない。

どちらが優れているかを決めたのでもない。ヨルが選んだのは最初から、

“二人”だった。

ヨルファミリア加入記録

ゆーカス——後の第5席。

いんカス——後の第6席。

加入条件——

二人一緒であること。

そして、この日から現在に至るまで、二人がヨルファミリアの戦場で互いを置いていったことは——



一度もない。

END

